

水俣病 — 発生から60年を越えて

Minamata Disease: Beyond 60 Years from Its Occurrence



日本の公害事件の一つ、水俣病。
工場が排出したメチル水銀化合物で
汚染された魚介類を摂取した人々が水俣病を発症し、
その被害は地域全体に拡がった。
人間の営みが被害をもたらした経験は、
東日本大震災の原子力災害や現在の温暖化問題とも重なる。
発生から60年以上が経過した水俣病を取り巻く
現在の状況について、お話をうかがった。

原田利恵 | Rie Harada
国立水俣病総合研究センター
国際・総合研究部地域政策研究室
主任研究員

聞き手
岩佐明彦 | Akihiko Iwasa
法政大学 / 会誌編集委員会委員長

前田昌弘 | Masahiro Maeda
京都大学 / 会誌編集委員会委員

佃悠 | Haruka Tsukuda
東北大学 / 会誌編集委員会委員

佃悠=文

被害を多く出した集落の一つ。家々のすぐ目の前が海。日常の中に魚をとって食べる生活が息づいていた。汚染という言葉が似つかわしくない、透明度が高く美しい海が続いている（撮影：会誌編集委員会）

— 水俣病とはどのようなものだったのでしょうか。

水俣病は1940年代には既に発生していたと考えられます。地名を病名につけないというWHOの勧告に従えば、現代では「チッソ(株)メチル水銀中毒症」と表現した方が適切かもしれません。当時、新日本窒素肥料(現チッソ)株式会社の工場排水に含まれたメチル水銀が魚や貝などに蓄積し、それを摂取し続けた人々が水銀中毒となり、感覚障害、運動失調、言語障害、身体障害、精神障害などの症状が現れました。当初は原因がわからず、同じ家族や同じ地域で患者が発生したため、伝染病が疑われました。その後、メチル水銀が原因であることが判明しましたが、ミナマタはアウシュビッツのように人類が忘れてはならない歴史を背負った重要な地名になりました。病名変更の議論は、この点への留意も必要です。問題だったのは、症状のある人がみられ始めてから、工場排水の影響が疑われ、熊本大学が排水に含まれる重金属が原因であることを発表してもなお、排水を停止せず、被害を拡大させたという企業犯罪と行政的不作為の側面です。劇症で亡くなった方、成人期に発症した方、小児性や胎児性患者、また長い間自分自身が水俣病だと気づかなかった患者など、患者の方の状況もさまざまです。現在も患者認定を求めて裁判を係争中の人もいます。

— 患者として認定されるというのはどういうことなのでしょうか。

1956年に田中静子さん、実子さん姉妹が病院に運び込まれ、原因不明の脳症として保健所に報告されました。この届けが出された5月1日が公式確認の日となりました。姉妹はそれぞれ5歳と2歳での発症でした。静子さんは8歳で亡くなりましたが、実子さんは現在、水俣病と認定された義兄や24時間の福祉サービスのサポートを受けて在宅で生活されています **fig.1**。認定は医師の診断書をつけて行政に申請し、その後、行政内の認定審査会が開かれます。しかし、認定される方は限られていて、認定や補償に関して長く係争が続いてきました。2004年の関西の原告による最高裁判決により、被害を拡大させた国と県の責任が認められ、それにより、ようやく被害を訴えはじめた方もいます。熊本県では、これまで22,046人が申請し、1,759人が認定されました。12,971人は棄却、6,946人が何らかの事情で取り下げ、370人が結果を待っています(2023年7月現在)。

— 新たに認定申請をされている患者さんたちの背景にはどのようなものがあるのでしょうか。

地域全体が汚染されるということは、自分だけでなく家族や周りの人にも同様な症状が現れるので、症状があることの方が普通だと思ってしまうことが考えられます。ま



fig.1 田中実子さんは実家で長く生活してきたが、災害リスクの高い地域でもあったために、数年前に高台の県営住宅に引っ越した(撮影：会誌編集委員会)

た、学業への遅れなどがみられても、専門家は漁村集落と都市部、社会階層間の教育格差と捉えて、それをメチル水銀の影響と結び付けなかったことも原因かもしれません。また、水俣ではチッソは、現在も主要産業の一つです。多数の市民の生活が依存する産業だからこそ、さまざまな立場や考えが市民の中でも混在しており、水俣病だと自分自身も容易に認めることができなかったのだと思います。

— 患者さんご自身も高齢になってきているかと思えます。現在はどのように過ごされているのでしょうか。

在宅で生活されている方は少なくなり、明水園のような水俣病患者さんのための医療福祉施設に入所する方が増えました。胎児性・小児性の患者さんで親御さんが介護されていた方も、親御さんが亡くなって自身も高齢になり、より多くの介助が必要になってきています。在宅では、24時間の介助を使われている方、施設のショートステイや生活支援を活用している方などがいます。子どもの頃に明水園に入所し、50年以上もそこで生活している方もいますし、終の住処となるグループホームを作って入所している方達もいます。

— 事件が表面化して以降、水俣病に関しては多くの支援者の方が全国からいらっしゃったと思います。60年を経て、支援者の方はどのように患者さんに関わっているのでしょうか。

現在も係争中の裁判や認定申請の希望をする人もおり、そのサポートを続けている方もいます。また、患者のみなさんも高齢化してきているので、その生活支援や居場所づくり、住まいづくりといった活動をされている方も少なくありません **fig.2-6**。1年間水俣で共同生活を行い、農業に取り組みながら患者さんの支援もする、生活学校というプログラムで訪れたことをきっかけに、移住して家族をもうけた人や、一度他で生活した後に数十年ぶりに水俣に戻ってきて患者支援を行っている人もいます。支援者のなかには、同じ活動を続けている方だけではなく、患者支援の取り組みから、有機農業の活動や環境教育の普及活動に展開した方もいます。また、支援者の子ど



fig.2 (上) 水俣市南部もやい直しセンターおれんじ館。患者の方と他の市民が気軽に交流、集える場として建てられ、介護予防のデイサービスなどでも利用されている（撮影：会誌編集委員会）
 fig.3 (中) 遠見の家。患者さんだけでなく、高齢になった支援者の日常の居場所となっている。NPO では患者さんのさまざまな生活支援や行政手続き支援を行っている（撮影：会誌編集委員会）
 fig.4 (下) ほっとはうす。近くに患者のためのグループホームおるげ・のあがある（撮影：会誌編集委員会）



fig.5 (上) きぼう・未来・水俣。商店街に設けられた患者の方の居場所。取材当日は商店街の夏祭り子どもたちも立ち寄って遊んでいた（撮影：会誌編集委員会）
 fig.6 (下) 相思社による水俣病歴史考証館。水俣病に関する貴重な資料が保管・展示されている（撮影：会誌編集委員会）

fig.7 元患者の家を改修。堤防設置以前、目の前の海は海水浴場で、公衆浴場もあった（撮影：会誌編集委員会）



も世代が新たなかたちでの支援や取り組みを行っているという例もあります。水俣に住んでいなくても、定期的に通ってくださっている方、大学などの教員で、学生を連れて毎年訪れてくださる方もいます。小中高校の頃の訪問をきっかけに大人になって個人的に訪ねてくれる人もいますね。石牟礼道子さんの文学作品から入った方でも、初期の方は社会問題の観点から水俣病に取り組み続けていて、最近では石牟礼さんの作品や世界観、本人への憧れやリスペクトが強い方が多いと思います。

— 支援者の方も代替わりしたり、外部から若い世代も入ってきていたりすることが驚きです。

最近では、水俣病だからということではなく、NPO で働きたくて、その選択肢として水俣を選んだという人もいます。また、支援者2世といっても、関わり方の距離はさまざまで、親の取り組みを引き継ぐ形で直接患者さん

たちの支援をしている人もいれば、元患者さんの家をセルフリノベーションして、コワーキングスペースのようなものに作り替えようとしている人 fig.7 や、オーガニックの柑橘類づくりなどに取り組んでいる人もいます。親世代の支援者同士の関係性とはまた違った形で、相互につながっている例もあるようです。

— さまざまな取り組みや支援があるように見えますが、患者さんはどのように利用されているのでしょうか。

その人ごとの事情や、支援者との関係性によって、それぞれの場所に行ったり、支援を受けたりしています。それも固定的な関係ではなくて、その時々状況によって変わります。

患者さん自身が主体的ではないかというところではなくて、電話でかなり連絡を取り合っています。構音障害のある方が多いのですが、注意深く聞いていると電話でも理

解できるようになります。患者同士や身近な支援者だけでなく、子どもの頃からマスコミやたくさんの方の訪問を受けていますから、そういう方たちともつながっているようです。また、「若かった患者の会」という患者さん主体の活動もあります。前身の「若い患者の会」は、患者さんたちが20歳の成人の記念に何か成し遂げたいということで、同年代の石川さゆりさんを招いてコンサートを開きました。還暦になって再び石川さゆりさんをお招きし、「若い患者の会」は「若かった患者の会」と名称を変えました。コンサートが終わってからも続いている会合では、月一度のペースで患者（メンバー）はもちろんマスコミ関係者も含め、これまで関係を紡いできたいろんな方が集います。メンバーもいろいろな提案をし、無理のない範囲で楽しみながら他人との関わり方を変化させているようです。

— 健常者でも、人間関係や場所との関わり方は変化していきますし、その場に相応しい振る舞いをしますから、自然なことですね。原田さん自身についてお聞きしたいと思います。ご専門と水俣病との関わりについて教えてください。

私自身は熊本市出身ですが、父が水俣病患者さんに深く関わっていたことから、子ども時代は父と水俣を訪れることがありました。ただ、その時は患者さんや支援者の方に挨拶していたり顔見知りだったりという程度でした。東京の大学に通い、都市社会学を勉強していたのですが、環境社会学者で新潟水俣病を調査されていた飯島伸子先生との出会いから水俣病に関わりたいという気持ちが高まり、研究することになりました。それまではできれば水俣は避けていたいという気持ちの方が強かったので、不思議なのですが、2011年に国立水俣病研究センターに就職し、2年間商店街に拠点を設けて活動しました。家族の転勤によって一度職を離れるのですが、2018年から再び研究センターで研究に従事することになりました。

患者さんたちの社会的な環境の実態や、生活被害、親子・夫婦・地域といった人間関係がどのように変化したかといったことや、身体が動かなくなったことによる経済的困窮の被害の深さなどを生活史の観点で記述することを目指しています。最近では胎児性水俣病患者さんに着目しています。センターにあるアーカイブの活用も研究テーマの一つです。患者さんたちの過去の肉声データも残されて

いるので、そのときそのときに全力で取り組まれてきたことを記録したいと思っています。成果を少しずつ発表しているところです。

— 排水の出口にあたり高濃度の水銀が沈澱していた百間排水口のある水俣湾は、汚染された汚泥や魚をドラム缶に封じ込めた上で一部埋め立てられエコパークとなりました。まちの形も大きく変わりつつありますね。

エコパークには慰霊碑がもうけられ、毎年5月1日に水俣市による慰霊式が開かれています。慰霊式が行われる広場の周りには、患者さんや希望する方が寄贈した石の作品群が置かれています。自ら彫り上げたものや石工職人さんに頼んだもの、造形も千差万別です。不知火海を臨むように置かれています。最近では道の駅もリニューアルされました。

チッソ旧工場の煉瓦造の建物は、一部が残っていて、インスタレーションやイベントに使用していましたが、つい最近解体されてしまいました。工場の水が排水されていた百間排水口の樋門の保存をめぐるも現在専門家が入って議論されています [fig.8](#)。

— 水俣病発生の痕跡がなくなりつつあるということですね。起こってしまった問題を次世代まで残さないということは大事ですが、そのためにも何がなぜ起こったのかということをしるしく理解して、引き継いでいくことが重要ですね。そのことは、水俣病への理解だけでなく、このような人災を再び引き起こさないことや、次に惨禍が起こったときの対処への教訓になると思います。

2023年7月29日・30日、水俣市にて

fig.8 手前の排水口が百間排水口。右手に広がっていた百間湾に工場排水を排出していた。湾の大部分は埋め立てられ、エコパークとなっている（撮影：会誌編集委員会）

